

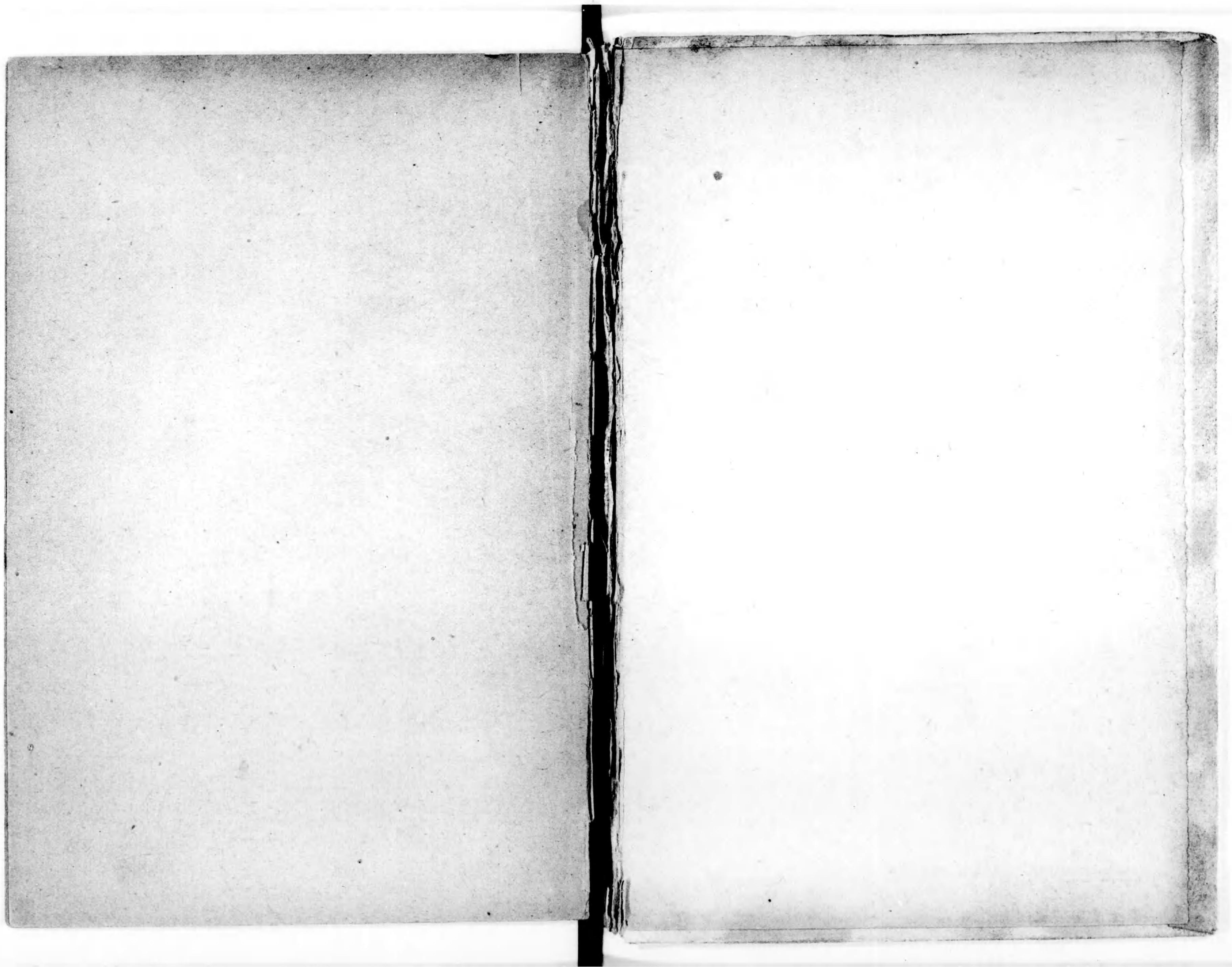
特103

927



始





持103
927

百田宗治著

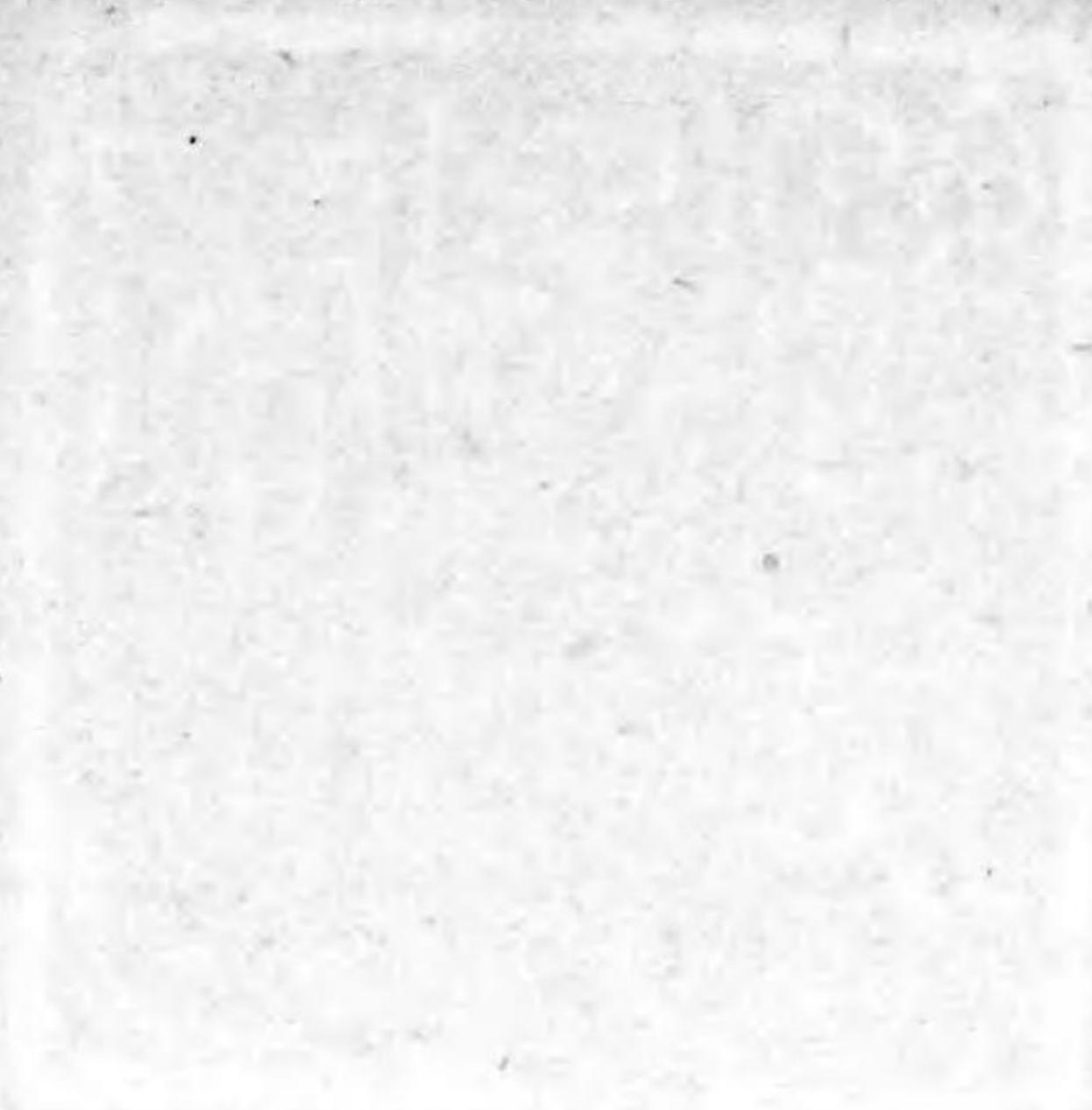
詩集
一人と全體



表現社版
千九百十六年

大正
5. 9. 4
内交

柳宗悦氏に



序

是等の詩は大正四年（千九百拾五年）六月より、大正五年（千九百拾六年）七月に至る一年餘の間の余の所作である。是等の詩の

序

ほとんど總ては余自身の經營する雑誌「表現」の初號以下に發表したものである。余の書いた詩は之れである。余としては他の詩は得られなかつた、嘲笑や默殺やまたは反對の人々の聲は余の關する所では無い、然し余は余の詩の讀者を狭き人達のうちに求めたくは無い、余は余の詩が總ての人達に讀まれることを望む、よしそれが小さいものであつても、余は夫等の人々の胸

1

裡に於て何者かを附與し得るなら幸福なので有る。ほごんご友人ご云ふ程のものを持たぬ孤獨のなかで自分は是等の詩を書いた、然しながら是等の詩は反對に如何なる人達にも——精神的に如何に遠い生活を營む友人にも——讀まるべきであることを余は確信する。

此世は美しいご云ふ意味では人生は美しくは無い、寧ろそこには醜惡ご虚偽ご不均衡が充ちてゐる、然しながら是等の醜惡や虚偽や不均衡やその他の様々の不正や不幸やにかゝらず、夫等のものにも夫等の存在の根底に於て美を見出し、力を感じる時にそして他の萬家、變化、推移、進歩に吾々が原始的な驚

異ご美を感じる時に吾々の生活は絶體に美しく、底知れぬ意味ご輝きのうちに在る。それは一切のものを肯定する吾々である。苦惱もまた茲より生じ來る時に吾々の力である、吾々は戦ふ、しかし吾々は感謝を以て……。

千九百拾六年八月

實塚にて

百田 宗治

目次並びに製作日附

— 配列は作順による —

目次

自分一人 (千九百拾五年六月)	三
媒介者なしに (全)	七
一人と數人 (全)	一一
デモクラタイ (全)	一四
人類は (全)	一五
大ひなる騒音のなかの低きベース (全 七月)	一五
あるマダムに (全)	一六
渦まいてゐる力 (全 八月三日)	一八
孤獨に於ての甦り (全)	二一

目次

僕は一人の女に接吻しやうとは思はない (全)	二三
僕は女性の肉體を意慾する (全)	二四
八月の市街 (全)	二五
彼女の甦り (全 九月)	二六
空虚なる合奏 (全 拾壹月拾八日)	三四
心の悦びを以て (全)	三五
實行者と自分 (全 拾貳月壹日)	三六
十字街に立つて (全 拾貳月五日)	四二
山脈の幻覺 (全 拾貳月八日)	四四
私の歸つて來るのはこゝだ (全)	四六
難破者の歌 (全 拾貳月廿四日)	四八
地を掘る人達に (千九百拾六年壹月廿壹日)	五九

僕等のもので (全 貳月拾五日)	六三
友人M・Oに (全 貳月拾七日)	六五
行詰つた世界のデカダンス (全 貳月拾八日)	六六
僕のやくざな過去によつて (全)	七一
あらゆる繩を解き放て (全 參月拾參日)	七三
いまは分娩の苦しみに悩む時だ (全)	七七
高天をめがけて (全 四月五日)	八〇
バベルの塔 (全 五月五日)	八二
一個の方舟 (全)	九〇
吾々の神 (全 七月)	九一

一人と全體

自分一人

一人と全

自分一人だ、

何をするにも自分一人だ、

何を考へるにも、何を祈るにも自分一人だ、

自分は説明はしない、

自分は理解を要求しない、

自分の微妙さを知るものは自分をのぞいて無い、

自分を苦しめるのも、自分を判断するのも、自分を罰するのも、それから自分を悦

3 はし、自分を許すのも自分一人だ、

味方に求めるのは自分一人だ、
 敵として呪ふのも自分一人だ、
 感謝は自分一人の上であり、
 憎悪も自分一人の上にある、
 生きてゐるのは自分一人だ、
 動いてゐるのは自分一人だ、
 意欲しつゝあるのは自分一人だ、
 獲得しつゝあるのは自分一人だ、
 神は祭壇にも説教所にもゐない、
 悪魔は地の底にも「死霊の山」にもゐない、
 モーゼもヨセフもキリストも要しない、
 釋迦も孔子もマホメットも必要だ、
 聖書もウバニシャツドも百卷の經書も用ない、
 ヒリドリヒ・ニチエもフヨドル・ドストイエフスキもワルト・ホヰットマンも、

モリス・メラルリンクもポール・セザンヌもヰリアム・ブレークも不必要だ、
 あらゆる神話を焼いて仕舞へ、
 傳説、歴史、あらゆる宗教、あらゆる科學を捨て去ることを要する、
 歩め、自分一人、
 苦しめ、自分一人、
 造れ、自分一人、
 産め、自分一人、
 自分はいつもたゞ自分のものだけで手に一杯だ、
 いつも背に一杯だ、
 いつも持ち切れぬ重荷が自分の上に押しかかる、
 自分は沈黙する、
 自分が出發する、
 自分は躍進する、
 自分は獲得する、

6 自分は… 自分は…。

體全と人一

媒介者なしに

體全と人一

媒介者なしに、

個々と個々を以て進まう、

時としては言葉をさへも…

われらが存在するのは個々に於てゝある、

吾々が發育するのもまた。

7

不要のものを振捨てるのに吾々は躊躇を持たない、
たゞ存在するものはない、

みな進まうとするのだ、
 みな獲やうとするのだ、
 みなレアリザツションしやうとするのだ、
 植物のオルガニズム、獸類のオルガニズム、そして吾々の肉體のうちの同じもの、
 靈魂は眠りの暇を持たない。

君のものを示せ、
 余のものを示さう、
 示し能はないものゝためには吾々が發見しにゆくだらう、
 吾々は鍵を持たない、
 ・(そして呪文をも)
 だから吾々は力を持つてゆく、
 誠實を持つてゆく、
 信念を持つてゆく、

そして吾々は眠れるものをめざませる、
 死せるものをもまた——。

たゞ産むものはまことのウマニターだけだ、
 吾々はウマニターのために吾々を愛し、
 生活を愛し、
 社會を愛し、
 國家を愛し、
 すべてのものを愛する、
 そのためには吾々の死をも辭さないのは、
 ウマニターこそは吾々よりも偉大なものであるからだ。

吾々は個々である、
 そしてウマニターは總和だ、

吾々はそこへ到着しにゆく、
 吾々はそこへ旅立つた、
 そして吾々はいま砂漠の旅人である、
 吾々が求むるものは單なるオーシスにあらず、
 またかのみどりの樹影ではない。

一人と數人

自分は一人であることを感謝する、
 自分は一人であることに力を感ずる、
 自分は最後の最後まで一人であるだらう、そして余は誰人をも所有せず、また誰人にも所有されず、たゞ一人の道を歩むだらう、
 自分が自分を表現するときに、余はそれを自分以外のものに對してはしない、そして余は自分以外のものを認めず、あくまでも自分一人の動機と力と進歩のうち、
 自分を鍛へてゆく、そして余が表現してゆくところの者はそれは人類のためである、そして余自身の者である。

人類とは余であつて、外の何者でもない、然して他人もまた他人自身のうちに人類をみるときにのみ人類であるだらう、

自分が見るところのものはすべて自分自身であつて、決して他の何等の現象ではない、現象であるときにすべてのものはその眞實の生命を失ふ、そして最も低級な空間の氣のうちに消失してしまふ、

失ふことの出来ぬものはアンデヰヰヂユアリテである、そしてそこにのみ力があり、進歩があり、不動のヰリテがある、そして生存があり、生長がある。

彼等の集團から失はれゆくものをみよ、

彼等のすべてのものが何者かを所有してゐることく信じてゐる、

彼等のすべてが確固たる所有を所有せず、究極を知らず、不安定で、孤疑的で、いつも無決斷である、

彼等は合唱する、彼等の聲が不揃ひにあるものゝ方へのほつてゆく、然しその過ぎゆくあとの空虚と無反響をみよ、その悲惨をみよ、

彼等は沈黙を怖れる、彼等は何かしら語り、何かしら痴話してゐる、彼等が黙してあるときに彼等の靈魂は最も卑しき死の面にある、そこに彼等の効なき努力の死にゆくを見よ、

すべてのものから彼等は眞實を閉してゆく、眞實のものゝ發育を沮止してゆく、彼等はそのものゝ何であるかを知らずに、たゞある形なきものとしてそれらを怖れる、

彼等はいつも賑やかである、いつも楽しさうである、いつも愉快げである、しかしそれだけで彼等は何者をも所有しない、そして楽しさ、愉快さ、賑やかさが彼等の存在にするごい投槍をこゝろみてゐるにもかゝはらず、彼等に裏切りをみせてゐるにもかゝはらず、彼等はそれを關知しない、

おゝ苦惱よ、吾は汝をむかへる、孤獨よ、吾は汝をいだく、眞實よ、吾は汝の前にひざまづく、

動かすべからざる尊きわが一人、無盡藏なる力の發現、眞實のものゝ呼吸が自分の脈搏を領有してゐる、そしてそこから自分は自分を導く聲をきく、永久の、然し

て力に充ちたる……

一人よ、汝は生存する、

一人よ、汝は發育する、

そして失はれゆくものはモツブである。

デモクラテイ

おゝデモクラテイよ、

汝を讚美するものも、汝に反抗するものも、すべて汝の淵のうちに、汝の腕のうちに歸結してゆく、

この世は唯一つのオルケストラ、

見わがたき高所より指揮する一人、

吾等の樂器はたかくひびき、
吾等が唄は盡きるときなし。

人類は

樹木はその葉と梢を以て世界を掩ひつくさうとしてゐる、

動物は繁殖を以て、

然して人類は？

大ひなる騒音のなかの低きベース

大ひなる騒音のなかに低きベースがある、
 騒音の不秩序と亂調のうちにあつて失はれず、それは常に吾等の耳にするところの
 ものゝ外に續いてゐる、
 そしてその音のなかに吾等をめざませる短い「時」、
 ——そしてその時がすでに過ぎ去る。

あるマダムに

君の秘密の悦樂と暗黒の世界のうちに幸福あることを、
 そして君の一生の上に不幸の來らないことを、
 おゝ僕は祈る、
 君の髪と肉體の上に永久の處女のとゞまる様に、しかし天は開かれた、

左様なら……

渦まいてゐる力

うづまいてゐる力、
 苦痛のなかに逆まく眩惑、
 理知と冷静を失つた動力、
 おそろべき力がいま僕の全身心に湧き返る、
 狂ひ、叫び、走り、飛ぶ、
 一刻も停止せず、一瞬も休息することなく。

おゝお前は何を叫ぶ、

何を望み、何をめがける？

お前は一團の火だ、

地球の底に燃ゆる炎だ、そしてかの天空にくるめいて廻轉する太陽だ。

おゝ僕はお前を怖れる、

あまりにお前の疾驅のもとに引摺られてゆく僕自身に怖れる、

お前は何處へ僕をはこぶのだ、

どこに僕を置かうとするのだ、

おゝ僕の眼はくらむ、

僕の耳は盲ひる、

僕の血は失はれる。

燃ゆる火の接吻、
 熱湯のうちなる抱擁、

指のさきにも爪にも、

一筋の髪の毛の末端にも、かく手にするペンにも、お前の力は感じられ、それに溢れ、充ちてゐる、

お、僕はそこにお前の叫びをきく、

お前の炎をみる、

お、しかし僕は遂にお前を理解し得ない、

お前を正視し得ない。

観全と人一

僕は盲目だ、

僕はたゞ引摺られてゆくばかりだ、

僕は何事もし得ない、

僕は何事をも成就し得ない、

たゞ傍観するばかりだ、

たゞ怖れるばかりだ。

観全と人一

お、お前よ、

あまりにも燃わくるめき疾駆するお前よ、

あらゆる生長、あらゆる生殖の力を一瞬にみたしのぼるお前よ、

僕はお前を怖れる、

僕はお前を怖れる、

そしていま僕は力をすら持たない！

孤獨に於ての甦り

僕は人と和し得ない、

僕は求めて孤獨に下つてゆく、

そして、おゝ孤獨こそは最も憎むべき敵である、最も呪ふべき、最も怖るべき……

孤獨こそ僕には堪わがたい、

孤獨は僕を押へ、

孤獨は僕を窒息せしめる、

しかしながら僕はそこに住居を求める、そこにならでは僕は僕の家をみいだし得ないことを感じる、

僕は必然にそこに求めてゆく、怖るべき窪地、その底の闇へ。

しかしながら僕は悲しまない、

その氷の腕が僕を抱きしめやうとも、

その憎むべき呪ふべき監視のうちに苦しめらるゝ時も、僕はその峻厳な壓迫に堪わる、

その鋭い刺撃を忍ぶ、

僕が死果てたと感じたとき、

あゝそのとき僕は甦る……

僕は一人の女に接吻しやうとは思はない

僕は一人の女に接吻しやうとは思はない、

いつも虚飾で、いつもくだらぬグニテの慾求者で、小心で饒舌で、人を陥入れることに平氣な一人の女を愛しやうとは思はない、

僕が愛するのは、おん身等の總てに對してある、

すべての女性はすべての男性の前に捧げられねばならない、

(そしてすべての男性は、すべてのおん身等のものである)

そして僕は、かくも深く、かくも強く、かくも心狂ふまで女性を愛する僕は、おゝ僕はかの美しく優しくなつかしき妙なる女性おん身のすべての精神、すべての肉體に接吻を重ねる。

僕は女性の肉體を意慾する

僕は女性の肉體を意慾する、
それに觸れ、それに接吻し、それに涙を感ずることを欲する、
そして同時に僕は最も見難く、最も吾々からはるかなるものに僕の精神と肉體の
すべてを捧げる、
彼の前に僕は斷食し、僕は容易に自らを殺す、
おゝ愛よ、天地に充ち溢れたる汝の愛！

八月の市街

八月の燃わたる市街、
十字街の中央は全く人から途絶わてゐる、
そこには一匹のあわいで通る犬をみるばかりだ、
そこには聲もなく、動きもない、
しかし素より僕はそこに一本の緑の樹木をもみなかつた、
其處で僕は叫んだ、
僕はそのこだまを聞いた、
僕はたゞ太陽をみたのみであつた、
それから白く裂けかゝつてゐる土を

彼女の甦り

ある夕、私は思つた、

私は地球上に生存するあらゆる動物、植物、人類、それからその外のあらゆる無機物に至るまで、すべてのものを私と共に包含したいと思つた、

私の知らぬ、しかしながら私自身よりもよく知られてゐる何億萬人かの人々、

あらゆる職業に従事し、あらゆる思想に、あらゆる境遇に動き、動かされつゝある

すべての人々、

老人、小兒、男子、女子、

病氣をしてゐる者も、歎んでゐるものも、小供を産んでゐるものも、悲しんでゐる

ものも、泣くものも、

初婚の娘も、労働者も、華族も、裁判官も、兵士も、農民も、漁夫も、發明家も、

それからあらゆる猛獸、森のなかに棲息する偉大なる咆吼の持主、蛇、猿、カンガ

ルー、羊、それから犬、猫、

全世界に分布されたあらゆる種類の草、樹木、かの山を形づくる巖石、水、かの大洋、

あらゆる魚類、空を翔ける鳥のあらゆる種類、雲、かの大空に至るまで、

私はひとしくそれらのものゝなかに私の生命をひたしたいと思つた、

それらのものゝもに直接に生きたいと思つた、

それらのものを抱擁してそれらのものゝうちに永久の接吻にひたりたいと思つた、

それらすべてのものゝ悲しみを悲しみ、それらすべてのものゝ歎びを歎びたいと思つた。

しかしながらそのためには私はたゞ獨りであらねばならなかつた、

私は私に附随するところのあらゆるものを捨てることを要した、私の靈魂と、私を形づくるあらゆる要素、それから私の肉體のみが残されねばならぬことを感じた、

私は何もかもを投げうつた、

私は今や必要の何者をも持たない、

私の上着も、シャツも、靴も、

私の書棚のあらゆる書籍も、ペンも、紙も、

お、そのときに私はなほ捨てねばならぬものを持つた、

私はそのものに愛着を持つた、

私はそのものに涙を感じた、

私はそのものを捨てることに極度の悲哀を感じた、

私は死の苦痛を味つた、

それは私の愛する一人の妻である！

美しい髪と肉體と、それから優しい愛情を以て私の胸にすぎるところの彼女であつ

た、

私は彼女を愛した、

私は彼女を得るために困難な危険を犯した、

私が彼女と同棲するに至るまでに二人はあらゆる苦痛を忍んだ、

私等は力を合せて私等の共同の敵に向つて進んだ、

そして私等の力が遂に打勝つたのだ、

それから私等に平和が來た、光明が來た、

そしていま彼女は私のものである、

彼女は私の胸にのみ生きてゐる、

彼女はこの家を外にしてはゆくべき道を持たない、

彼女は私を離れるときに哀れなる孤兒であらねばならない、

しかし私は彼女をも捨てねばならない、

いまや私に附随するものはたゞ彼女のみだ、

私の肉體であり、血であり、靈魂である彼女のみだ、

その優しき愛情と美しい肉體のみだ、

私は今や唯一の彼女を捨て去らねばならない、

あらゆる未練と、涙と、愛と、慾望を捨て去らねばならない、

あゝそして彼女を最後のものとしてすべてのものを戸の外に押し出すべきに私は怖るべき扉の開かれるのを感ずるだらう、

そして彼女の歎歎が遠ざかつてゆくときに、私は偉大なる手を知覚するだらう、偉大なる呼吸を、

彼女を全く失ひ去つたときに、私はすべてのものを得るだらう、

あらゆる人類、あらゆる動植物、あらゆる無機物、

あゝそしてそのとき私は孤獨である——孤獨、おゝ私の求めてきたものよ、お前が私を看護つてくれるだらう、そしてお前のみが私を裸のままの世界に導き入れるだらう。

私は彼女を戸の外に押し出した、

彼女は何事をも解しなかつた、彼女は反抗した、彼女は私を凝視した、

そして遂に彼女は泣いた、その手布が涙に濡れた、

私はあらゆる内なる心に蜂起するところのものを殺した、

哀れなるデリラよ、私は遂に彼女を押し出した、

彼女の捕へた私の上着の裂ける音がした、

私は遂にそれに成功した、戸が内部から閉された、

彼女の烈しい泣聲と私を呼ぶ聲が聞えた、

私はその聲をきくまいとした、

私は鍵を下した、それから窓の下に走つた、

そこで一瞬間私は息を凝した、

おゝ恐るべき瞬間よ、私はそこにうち震ふ死を感じた、

おゝ永久の短かき時間よ。

彼女の歎歎が私の耳から絶たれた時、

それが全く失はれたと思つた時、
 (そして私は彼女が既に何處にか立去つたと思ふことが出来た時)
 あゝその時、私は怖ろしい力が私の部屋の戸を打開くのを見た、
 地上の太陽の幾萬を合せたかのやうな極度の光明が渦まいてそこから入り込んでく
 るのを見た、

おゝ神よ、

光のなかに充ち溢れたる歡喜のオルケストラ、人々の叫喚、ごよめさ、
 そして虎の咆吼、獅子の怒號、

私はあらゆるものゝ聲をきいた、
 足音を、歌を、叫びを、

私はそこに廣漠たる原野をみた、

みる限りの緑の平原、樹木、水の流れ、そして嬉々として戯れ走る動物、草の花、

樹木には果實があふれてゐる、そして畑には收穫物が……

おゝ大洋よ、洋々たる海原よ、その上を走りゆく帆船、

あらゆる鳥類が空間を自由に飛翔する、そしてあらゆる獸類が人の間を駆けめぐり、
 おゝそこには人が充ちてある、

萬の階級、萬の種族、

何と云ふ數多い人であらう、

歡喜の歌が私にきこゆる、

私は両手を舉げた、私は群集のなかに躍り込まうとした、

おゝその時、私は人々の間に擁せられてはゝむむ聖き一人の女性をみた、

彼等の中央にまもられて光のなかを歩んでくる一人の女性、

おゝそれこそは彼女である、

彼女の瞳、その頬、その身體が私に眩しい、彼女が私に近づいた、

おゝ、私は彼女の甦つてくるのを見た、

彼女は真紅の上衣を着、頭に神の榮光と冠を持つてゐる、

おゝ萬人の歡喜よ、

すべてのものが彼女を圍繞して來た、

すべてのものが彼女を讃嘆した、
おゝ私はいま人類に生きる、
私はいまあらゆるものをこの掌の上に受取る、
私は彼等のすべてを抱き、彼等のすべてに接吻する、
おゝそして彼等のよろこびと叫喚にいま私の戸口は破られる。

空虚なる合唱

むしろわれ一人の唄を求むべし、
空虚なる合唱より得らるゝは死のみ。

心の喜びを以て

彼等心の喜びを以て躍る日きたれ、
全人間が見ねざるその喜悅におどる日きたれ、
小兒も老人も男も女も人類に生れきたりしことに心の雀躍をといめ得ざる日きたれ。

實行者と自分

自分は一人の實行者を知つてゐる、
 自分は彼に限りない尊敬と畏怖を持つてゐる、
 彼の呼吸を感じるときに自分は壓迫を受ける、
 彼の手を感ずるときに自分はある戦慄の過ぎてゆくのを知覺する、
 彼の通りすぎるときに自分はアンスピラシオンに打たれる、
 彼のみわざる光が自分を眩惑せしめる、
 彼の聲が自分の全身心に鞭うつ。

彼はいつもこの大地の上を歩む、
 彼の強く力に充ちた足音が永遠のひびきを残す、
 彼は地上を愛する、
 彼は草を愛する、
 彼は水を愛する、
 そのごとく彼はまた天空を愛する、そして樹木を、動物を、
 彼は一切のものを愛し、一切のものをその本來のかたち及び正しき生長の姿に於て
 愛する、
 彼はたゞ彼の欲するところのものを欲しにゆく、しかし彼はいつも正しい人類であ
 る、
 彼は忌み嫌ふものを嫌惡する、
 彼は一切の罪惡を憎む、罪惡とは死を意味するところのものである、生ける一切の
 死を意味する、
 彼はたゞ彼自身のみの信仰に生きる、そして正しい人類自身の…

彼は信念と實行の間に何等の間隙を持たない、

彼の生活は單一である、

彼は苦しまず、悲しまず、悦ばない、

彼は苦しみ、悲しみ、よろこぶ、彼はそのいづれにも深い感謝を持つときのみ苦しみ、悲しみ、よろこぶ、

彼は一切の否定を排する、彼にとつて存在するところのすべてのものは善である、

何故なら存在は必然を意味するからだ、そして必然ならざるもの、神の攝理の外に路を行くものは死である故に、

彼の眼は常に見ざるもの、上に輝いてゐる、

彼の耳は常にきこへざるものをきいてゐる、

そして彼の靈魂がいつもすべてのもの、上に開かれてゐる、

彼の腕はあらゆる力の前に屈しない、

彼の足はすべての大地の上に自由である、

そして太陽と共に健全なその體軀はいつもたぎりたつ血液と呼吸から充ちてゐる、

彼は老人を愛し、女性を愛し、小供を愛する、
彼は君主を愛し、主權者を愛し、税吏を愛し、軍人を愛し、囚人を愛し、労働者を愛する。

自分は彼が不斷に自分の傍らを歩み、自分の先きにゆき、また後から來るのを知る。
自分は不斷に彼の來訪を感じる、

自分は彼が自分に命じてゐるのをきく、

彼が自分を促してゐるのを知る、

彼が自分の手をとらうとしてゐるのを見る、しかし自分は自分が彼に従ふことのみだ不可能であることを苦しむ、

自分はまだ力足りない、自分はまだ力を出し切れぬ、

彼と共にゆくためには、自分はなほ不要のもの、多くを持つてゐる、醜惡のもの、多くを、不淨のもの、多くを、

そして自分が最も重大なるものに對して全然缺いてゐることを知る、自分がそれを

持つてゐないことを知る、
 しかし自分は彼を求め、
 自分はいつも彼の方にゆく、
 自分はいつも彼に手をさし出す。

自分が飛び越わがたいある絶壁に來たとき、自分はいつも彼がある見わがたい力に
 よつてこの絶壁を飛び越すのをみた、自分が躊躇しつゝある間に、
 しかし自分は彼に續き得ない、自分はたゞ尻込みをする、たゞ恐怖を感じる、
 ある大ひなる誘惑の手の來るとき、自分はそれを排してすゝむ彼を見る、しかし自
 分は危ない、自分はそのうちに捲き込まれさうになる、
 彼の注意と、彼の力づけが自分を醒ます、そして彼の手が自分を救ふ、
 彼は孤疑を持たない、彼は逡巡を持たない、
 彼は沈黙と飛躍を持つばかりだ、
 そして自分はいつもその間にさ迷ふ、

彼の足は強い、
 彼の足はいかなる沼地をもふみしめて進んでゆく、
 自分のはその一步一步に全身をかけることを要する、
 彼の腕はいつも完全な用意を持つてゐる、
 自分のはたわす不安と動搖の宇宙にたゞよふ、自分はいつも彼を求め、
 いつも彼を呼ぶ、
 自分は彼を失ふことは出來ない、彼から離れ去ることは出來ない、
 ある時が來るまで、ある「時」が自分と合致するときまで、自分がそれを獲得する
 日まで、
 一人の實行者が自分を導びく、自分はすがる、自分は呼ぶ、彼を彼の手を。

十字街に立つて

十字街に立つて、

僕は周囲を取捲くあらゆる種類の音に耳を傾けた、

アルトもある、ソプラノもある、ベースもある、

それは一大組織のオーケストラである、

そしてそれは一つ一つの獨立した樂の音である、

あらゆる種類の、そしてあらゆる異つた人々がそれごとく自分のキイを持つてゐる、

それは停止されることの無い奏樂壇である、

朝、晝、そして夜、

人々が戸を鎖して眠る夜半もなほそれは續いてゐる、

そこに現代のあらゆる人々の生活の聲がある、

あらゆる活動の、あらゆる思想の…

一室に閉籠つて難解な譜本に眼を曝す音楽家よ、

怪物のやうなピアノの前にかじりつく憂鬱の青年よ、
出でよ十字街の中央に立ちたまへ、

そこには時間を持たぬ永久の演奏會コンセルツォが開かれてゐる、
卿等の固定した樂器を捨てたまへ、

そして赤裸の人生の音楽家になりたまへ。

山脈の幻覺

寢臺から身を起して玻璃窓を通して外をうかつた時、
 自分は眞黒な瓦の屋根の上に晴れた高い空をみいだした、
 高い青い空、流れてゆく白い雲、
 この屋根の上の際涯なき背景、
 自分はその重疊した瓦屋根の上のこの背景のなかに、ある山脈のうねりを幻しみた。
 そこには密生した樹木の茂みがある、
 それは頂上である、折り重なる山脈のいたゞきである、
 高い空、流れてゆく白い雲、

いつか自分はある山脈の頂きに立ち、山また山の上に晴れた澄み渡つた秋の日をみ
 たど記憶する、

人及び人の生活を思ひ起すことを中絶せしめたその周囲のなかに、自分はある遠い
 不思議なノスタルジアを感じたことがあるやうだ、

そしてこの瞬間に自分の立つところは暖い屋根の下の一室ではなくして、峨々たる

一塊の山上の巖石の上であつた、

自分はいま限らるゝものなき雲を見、空を仰ぎ、山脈の頂上の氣のうちに呼吸する。

自分は涙を感じた、

自分はするどく強い實在の確定を感じた、

部屋に居つて同時に山脈の頂上に……

次ぎの瞬間に自分は窓の下の通りを地ひゞきたてゝ過ぎ行く自動車の音をきいた、
 それから電車を、喧轟を、

しかし余の幻覺はなほ破れなかつた、

余はそこで山上の氣を呼吸した、

そしてある高いものゝ上にそゝがれる人間の涙をみた。

私の歸つてくるのは此處だ

穏やかで静かなランプの光！

私の歸つてくるのは此處だ、

卓の上に柔く輝いてゐるランプの光、

一つの椅子、それから鐵製の粗末な寢臺、

私の歸つてくるのは此處だ、

窓の外のすさまじい颯風、雨、

電車のひゞき、街の騒亂、

それらのものから私を救つてくれる光、

私はこの椅子に腰を下し、

この卓の上に一卷の書物を開き、

そしてこの柔い光が慈母の掌のごとくに自分を包むのを待つ、

こゝで私は静かに仕事をし、

友人を思ひ、

また下の部屋で仕事をしてゐる妻を思ひ、

それから、それよりももつと深い熱情で人類のことを考へる、

私はむしろ暴風を好む、

むしろ大雨を好む、

むしろ群集の喧轟と機關のわめきを、

しかし私はこゝへ歸つてくる、

汝の光の前に歸つてくる、

あらゆる希望と努力の上に汝の柔い接吻を受けるために。

難破者の歌

僕はいまその草のある根を手にした、
 それは不常に波濤の洗ふ岸にくづれかゝつた土壤のなかゝら露出してゐる白い根だ、
 いま僕の生命はこの一莖の草の根にかゝつた、
 僕の全身の力がその手に集つた、
 僕の全呼吸がそこに凝集した、
 僕の魂がそこに怖ろしい鼓動から打震ふのを見よ、そしてその湧くばかりなる歡喜
 のうちにあるのを見よ、
 僕の血液が炎のごとく燃わあがるのを見よ。

そしていま僕はうしろを振返る、
 おゝ極まりなき大洋、怒濤と嵐に狂ひざはめく怖ろしき大洋、暗黒と知られざる支
 配のもとに永久の盲目的状態をつゞける大洋、
 僕の全身はまだそのうちにある、
 僕の全身はまだその大洋のうちにもてあそばれるまゝにゐる、
 そしていま僕は岸をみいだした、
 僕の手がその土壤に露出する一莖の細い草の根をつかむ。
 僕は冷たい怖ろしい眞暗な大洋のなかに僕自身をみいだした、
 僕をこゝまで運んできた船の姿はもう見えない、
 しかし僕はまだその汽笛をおぼわてゐる、
 哀しげに、迷へる小犬か、死に瀕した鳥のなく聲の様に響いた一すじの最後の汽笛
 をまだおぼわてゐる、
 それが遂に無効であつた、そして僕はまだその絶體のたゞ獨りなる笛の音を頭のな

かに聞く、

それは破船した、そしてすべての乗客が海に投じられた、ある夜の颶風と暴風雨、山の如き怒濤が船をさらった、船は既に久しく人知らぬ大洋中に針路を失つてゐたのだ、そして既に食料は盡き、水は切れて了つてゐたのだ、

阿鼻叫喚の聲が何等の反響の無い遠い大洋の真中に次第に失はれて行つた。

あゝすべての人は死去つたか、すべての乗客とすべての乗組員は海底の藻屑となり終つたか、そして惨忍な魚が夫等の人々を喰ひ去つたか、

僕は見た、明らかに死につゝゆく人を、力を失ひ、希望から捨てられた怖ろしい狐獨と絶望のうちに最後の呼吸を奪はれつゝある人々を、死骸を、

それは屢々僕のかたはらに、それから前方に、また僕の後に見出された、最後の救ひを求める手が僕のに觸れた、

その聲が波の間に間に聞えてきた、

あゝそれらの人々は死に去つた、再びもう僕はそれらの人を見まい、再び、永久に……

しかし僕は泳いだ、

暗黒のうちに僕は見ねざる怒濤と争つた、

扳手を切つた、

あゝしかし一晝夜の力闘が次第に僕の力を奪ひはじめた、

僕の手は麻痺を感じてきた、

僕の足は凝結してゆくものを感じ出した、そして僕の咽喉は渴し、僕の眼は次第に眩んだ、

おゝ怖るべき時が近づいた、

しかし僕はその瞬間にも尙反抗と生き切るための努力の總てから絶望しなかつた、尙も僕は信じた、

僕はつゞけた、

僕は闘つた、

僕はたゞ打勝たうとした、

僕はむしろ狂した、

この瞬間の格闘が僕を生死からわかたつのであることを知つた、

この瞬間に人間自身の力がためされるのだと思つた、

この瞬間に勝負が決せられるのだと思つた、

僕はつゝけた、闘つた、むしろ狂した、

そしてあゝ遂に僕は怒れる波の上に跳り出た、

僕の腕はさらに力を獲た、

僕の呼吸は甦つた、

僕の力は恢復した、

暗黒のなかに僕は光を認めた、

僕は泳いだ、僕は進んだ、

過ぎゆく悪魔の聲と呪咀をうしろに聞いた。

しかし尙幾日かの暗夜と打つゞく颶風のなかに僕は生死の一枚の扉の前に立つた、
幾度か僕の力は盡きかけた、

幾度か僕のはりつめた自信が失はれてゆかうとした、

自分は忽如として死の安樂のうちを身を投げ入れやうとする誘惑にいざなはれた、
苦闘と反抗から夢中になつて吾の意識さへおぼろになつたとき、

僕は僕の肉身を取捲くある柔い手を感じた、むしろあたゝかい呼吸を感じた、

そのものゝ前にはあらゆる僕の抗爭も努力も困苦も不要であるかに見わる一種の甘
さを見出した、

自分にとつてはその時「死」は最も容易に自分を救つてくれる神であつた、

慈母であるごとくであつた、

僕は一切の僕の活動を中絶せしめ、意志をかなぐり捨て、生き切る慾望を捨てさへ
すればよいのであつた、

眼を閉じ、疲れた腕を組み、自由を失つた足を波の欲するまゝに任せて了へばよい
のであつた、

そこには樂園があつた、泉があつた、柔い褥があつた、誘ひの腕のなかに僕を待つ
消れ去りゆく忘我の頽廢があつた、

その時急に怒濤は収まり、風は風ぎはじめたかに感じられた、
おゝこの瞬間よ、僕は見た、

はるか波間を猛り狂ふ暗黒と怒濤と暴風雨のうちに雄々しくも抜手を切る一人の
英雄、挑み寄る一切の誘惑と苦難を退けて進む彼、

その髪は藻の様に亂れ、その頬はうちつゞく自然の暴虐にたゞ骨と枯れたる肉を殘
すのみだ、

されどみよ、彼の眼の射ることく貫くことく燃ゆることく熱度を、

彼は突進んだ、彼は波を切つた、彼はたゞ前方を望んだ、

さらに聴け、彼の聲を、

——たゞ生くべきものゝみぞ生く、

死者とたゆとふ者とは吾に用なし、

吾はたゞかの陸に、かの岸に、

あゝ吾はかの土地を抱かむ日まで、
かの太陽をみいづるまで、

わが腕は鐵のみ、わが聲は怒號のみ、わが信念は石のみ……

おゝ彼こそはあらゆる誘惑と躊躇の前に石であつた、巖であつた、力であつた、
おゝ既に彼は僕から遠ざかつた、

彼は既にはるかかをゆく、はるかかをゆく、

自分は慄然としてある嚴肅な戦慄の身内をよぎるのを感じた、

僕は全身と失はれかけた靈魂に怖ろしい電氣のひらめくのを感じた、

僕の眼はさめた、僕の靈魂はそこにうちひらかれる天地を見た、

かの柔き手と呼吸がいまは限りなき憎惡によつて發見せられた、

悪魔！安意と沈衰の死の手よ退け！

僕は再び怒濤のうちに投じた、一物も光あるものなき黒暗々の世界へ、投槍のごと

き暴雨と狂へるごとき風の世界へ、そして氷の刃の如き冷たさのなかに、

しかし僕はそのとき僕の内部の世界の正しく打開されるのをみた、そこに失はれざ

る光明の火花をみた、
 僕は闘ひの後の死をわがいた、
 力つきた暁の死を感じた、
 僕は最早何者も怖れない、何者も僕を抑留し能はない、何者も僕を壓迫し能はない、
 僕は耐れた、僕は猛進した、
 僕は歌つた。

見よ更に幾日かの苦闘、
 更に光と晝を持つことなき孤獨に於ての苦惱、
 撃破された難破船の木片、
 帆布のちぎれ、
 破損したる浮標、
 一滴の水も、一片のパンも望むことは出来ない、
 そして頭髮は汐のために針金のごとくに固くなつて頬の上に着いた、

指は腫れ上つた、爪は死んだものごとくに蒼白い、咽喉は渴した、鼻は嗅覺を失
 つた、耳もまたその働きを……

あゝ遂に見出したる美しき陸上よ！
 岸はある朝わが眼前に現れた、
 しかし空はまだ暗かつた、波は尙狂へる獅子の如くに岸をめかけて飛びかゝつた、
 あゝ一莖の草の根、

無限の太陽の慈味に充ちた一莖の草の根、
 そこには光と希望と熱からあふれてゐる、
 自分の手はいまその根に觸れた、
 いま僕はそのいたいたしい白い根をみる——柔い土壤の色を。
 おゝあらゆる陸上の力を所有するこの根、
 僕の全身心を救ひあげるこの根、
 僕はそれが何と呼ばれる草であるかを知らない、

しかし彼の種族はあらゆる廣い土地を結束してゐる、すべての土地をその繁殖と生長とで繋いでゐる、

自分はいまあらゆる陸上をわが腕のうちに抱いた、

あらゆる希望と光明と力とを、

豪雨よ、颶風よ、さらに逆捲く怒濤よ、

さらに汝は數多くの人をこの岸に送れ、

數多くの人間にその峻烈なる試練と難苦をそゝげよ、

誰かはそこに汝の手のうちに死ぬだらう、

しかし誰かは汝を防ぎ、汝を踏み残し、汝を征服しつくしてこの岸に来るだらう。

地を掘る人達に

地を掘る君等、

重い大きい鶴嘴を土地のなかに打込む君等、

おゝ汗する君等、

満身の力を一本の鶴嘴に込めてそれで生命の糧を得る君等、

その鶴嘴一本を愛する妻子を養つてゆく君等、

おゝ君等の足の下に何と土地が掘り下げられてゆくよ、

そこには既に暗黒の大ひなる洞がある、そして君達の鶴嘴のさきに眠りをさまされ

てゆく埋れたる沈黙がある、怖るべき未発見がある、切展かるべき世界が……

君の一枚の襯衣は汗にしんでゐる、
 君の頭髮はべつたりと額にたれ下つてゐる、
 君の双腕には血に充ちた力瘤の隆起がある、
 君の二本の足はしつかりと地上に下ろされてゐる、
 君の眼は鋭く、そして不斷に無限の愛に燃わてゐる——まことに君等ほど純粹の友情に生きるものは無い、君等ほど愛に飢へ、君等ほど愛に充されてゐるものは無い、
 君の指は太く、掌はひろい、君はあらゆるものに力限りの握手を求めることが出来る、
 あらゆるものが君等の掌のなかに眞實の感動と歡喜を經驗する、
 君の胸ははっぴろい、君の胸は熱した血と豊かな逞しい骨肉とで豊饒な土地の如くにふくれてゐる、君の胸はあらゆるものに開かれてゐる、君の胸はあらゆる健全な女性のもを受けることが出来る、
 君の力は何者をも貫き通す、何者にも打勝つ、何者をも恐れない、

君達の健康は絶體だ、君達の健康の前にすべての病氣の存在は失はれる、それらの
 想像は素より……

地を掘る君達、

君達の鶴嘴は鐵でつくられてゐる、

君達の鶴嘴はあらゆるものを粉碎しつくすだらう、

あらゆる偶像、あらゆる幻し、あらゆる根底なき信仰を打破るだらう、

あらゆる君達の行手の障害を突破するだらう、

君達は何人にも使役せられずまた何人にも犯されない、

君達は個人である、

君達の勞働は君達に天與のものである、

君達の力が君達を活かす、

君達の自由と、君達の權利と、君達の平等の愛の爲めに奮闘せよ、

君達相互の美しい友情が世界を掩ひつくしにゆくだらう、

君達のうち困れる者は君達の仲間が救ふだらう、君達のうち迫害せられるものは君達の仲間が回復しにゆくだらう、君達こそは中心である、君達こそは人間そのものである、君達こそはすべてのものの中樞である、君達こそは君達自身の支配者である。

地を掘れ君達！

地を掘れ君達！

土地は君達の前に宏大である、

君達の下に無限である、

君達の鶴嘴が君達を光の方に導くだらう、

未来の國の方に導くだらう、

愉快なる「實現」^{レアリザツション}の方に導くだらう、

地を掘れ君達、

やがて君達は掘りゆく土地の底から君達の太陽を見出すだらう、

眞實の光は君達を待つてゐる、
君達の鶴嘴がその暗黒の扉を打毀しに来る時を待つてゐる、
彼は君達の足音を聞いてゐる、
君達の鶴嘴の響きを聞いてゐる、
君達のシンセリタイに充ちた心臓の鼓動を聞いてゐる、
光は君達を待つてゐる、
光は君達を思慕してゐる。

僕等のもので

僕等のもので、

世界はやがて充されるだらう、

おゝ友人よ、
 僕等は共に生きる、
 共に呼吸する、
 僕等の聲は力足りないが、しかし永久に失はれはしない、
 僕等の歩みはのろいが、しかし停止される時を知らない、
 おゝ僕は君達を抱く、
 君達を呼吸する、
 そして僕達は更に眠れる一人の友を揺り起しにゆかねばならない、
 埋れる一人の友を、
 きづきつゝある一人の友を、悩める一人の友を、
 おゝ吾々のものが草の根の如くに大地の底深くその手を繋ぎあはすだらう、
 僕等のもので、
 世界はやがて充されるだらう。

友人M・Oに

僕の詩が君に力と刺戟を與へ得たか、
 僕の拙劣なむだの多い詩が、
 僕は耻じる、
 僕は君のうちのものに羞耻を感じる、
 おゝ友だちよ、
 君は僕の詩から受けたものを幾萬倍にして返してくれた、
 おゝ友だちよ、
 僕は君にお禮を云はう。

行詰つた世界のデカダンス

戦争はだんだん長びく、
 それに参加する國の數が次第に多くなる、
 彼等は一度勝てば一度負ける、
 彼等の兵士は寒い野や荒廢した市街に凍つた糧食をかじつて冬を暮した、
 彼等の敵味方は毎日塹壕をへだてゝにらみつこをしてゐる、
 彼等は退屈をまぎらすために音樂會を開いたり芝居をやつたりしてゐる、
 ある機會が來ると、ちよつと戦ふ、そして少しばかりの地面を奪ひ合ふ、何人かの
 人が死に、また傷く、

しかし軍費は絶え間なしに要る、
 既に何百億圓の金がそこに費されてゐる、
 おゝ、そして何百萬かの人間の生命がそこに失はれ、また傷いてゐる、
 彼等は相互に敵を絶滅するまでは戦ひは止められないと云つてゐる、
 しかしこの意味を貫く力を持つてゐる國は一つも無い、
 皆機會を待つてゐる、
 他の力を待つてゐる、でなかつたら時の力を待つてゐる、
 退屈と疲弊を忍んで他の様子を伺ひ合つてゐる、
 一つの國でも多く味方に惹き入れるやうにあせり合つてゐる、
 そのうちに何隻かの商船が撃沈される、多くの乗客が故なく死に、莫大な貨物が海
 底に沈む、戦鬪力の無い商船のみが彼等の敵だ、
 戦争はいつ終るか譯らない、
 彼等の生産は次第に減少し、物價は騰貴し、軍需品をつくる以外のすべての工場は
 閉鎖される、

あらゆる彼等の所有と力が戦争の上にもみ混がれる、
一切の他の者が閉却せられ、そして失はれてゆく、
戦へ！戦へ！

最後の一人も残さず全歐羅巴の國民を彈丸と劍の下に伏さしめよ、
汝等の文明がそこに壊滅し終るだらう、

今や制限された狭い汝等の一室は毒氣と混亂から充されてゐる、

汝等は窓を持たない、汝等の發明と研究、そして一切の汝等が人類の進歩と幸福の
名によつて求めてきたもの、科學の進歩の名によつて求めてきたもの、藝術と哲
學の名によつて求めてきたものが、その狭い部屋に堆積される膨大な不要の貨物
となり、それは次第に饜へ、腐廢し、惡臭を充し、遂には汝等のすべてを窒息せ
しめにゆくだらう、

既に汝等の發明した巨大な大砲は汝等を打ち、飛行機は汝等の上から怖るべき爆彈
を投下して一舉に汝等の國民を撃滅する、汝等の工場が製した砲彈や劍が汝等を
貫き殺してゐる、

毒氣はそこに渦まいてゐる、汝等の肺臟はそれによつて充されてゐる、
汝等の呼吸は次第に促進し、次第に失はれかけてゐる、

おゝ汝等の戦争、汝等の敵は獨逸人では無い、英吉利人では無い、露西亞人では無
い、汝等の敵は、一切の汝等の敵味方が共同を以て當るべきところのものだ、

敵の名に於て汝等は日々何人、何百人、何千人、何萬人かの同じ種族のものを殺戮
し、或ひはきづつけ、或ひは不具にしてゐる、

おゝかくして一切の敵を滅亡せしめた時は、汝等のすべてが滅亡する時で、あらう、
汝等の共同の敵は汝等の内部にある、

行詰つた汝等の文明の頽廢のうちにある、

それらの一切の腐廢、惡臭、毒氣のうちにある、

汝等の祖先、父母、そして汝等自身のうちにある、

おゝ戦争は永久に續くだらう、よし一時の休戦が汝等を和解せしめるとも、その共
同の敵を知ることなき汝等のうちに、いつかはまた盲目の争闘が起るだらう、暗
黒のうちに於ての同志打、

お、汝等の誤れる文明と暗黒への進轉、
一切の人間の生命と本質を外にした物質的の、そして空間的の汝等の所産は今や呪
はれてゐる、

煉瓦と大理石の生活、汝等の公會堂、事務所、工場、陸軍と海軍のための一切の汝
等の希求は怖ろしい外壁に逢着してゐる、

そしてそこに燃わ上つた猛火——汝等の生命を薪とするところの悪魔の呪ひ、

お、汝等のうちに人間を恢復せよ、若き人間を、

一切の放擲のうちに汝等自身を求め出せよ、

窓を求めよ、

然り一個の窓が今汝等には必要である、

赤裸なる人間の大氣はそこから汝等の部屋を訪れるだらう、

お、毒せられたる空氣と暗黒のうちのうづ高き汝等の死骸、不具者のうめき、飢餓

の叫び、一切のそこなるデカダンスの上に涼しき朝風が吹き入るだらう、

麻痺せる彼等をめざまし、糜爛せる彼等の内部を一掃し、彼等のために甦生を興ふ、

る一個の窓、

お、彼等のために窓を開け！

僕のやくざな過去によつて

僕のやくざな過去によつて、

僕の現在と未來を評價して呉れるな、

僕のやくざな過去に對しては僕一人がその罰を受ける、

僕の過去はもう充分に僕を苦しめた、

僕は一生その鞭から遁れ能はないだらうことを知つてゐる、

僕はそれを受けるだけの用意と辛棒を持つてゐる、

過去を否定する弱味を僕は持たない、

73
しかしそれらの一切の煩ひからは僕は立派に剝脱する、
みよ、僕はすべてそれらの古き外皮を脱ぎ棄てた、
それらの一切のものよ、一切の人々よ、
僕は君に訣別を告げた、
君達は見送る者だ、そして僕は出發する。

あらゆる繩を解きはなて！

あらゆる繩を解き放て！自縛の繩を！
汝の精神と肉體は數知れぬ見わざる繩によつて十重二十重に縛り上げられてゐる、
一筋は一筋より強く、一筋は一筋より汝の筋肉に喰ひ入つてゐる、
汝は既にこれらの繩目を平氣でゐる、
汝はこの繩目の苦しみを人間そのものゝ苦しみだと思つてゐる、
生きてゐる限りのがれられない苦しみだと思つてゐる、
生れついた時からの自然の枷だと思つてゐる、
しかし見よ繩は次第に殖はてゆく、

繩は次第に太く、次第に力強く汝を締めつける、
 汝の苦痛は次第に増してくる、
 遂にはこのものが汝の全身を掩ふだらう、
 汝の呼吸があらゆる種類の繩によつて沮止されるだらう、
 先づその一筋を切りはなて、
 最初の一筋を切るためには汝には信念と力が要る、
 汝の渦まく呼動を以て、
 汝のぬきがたい精神を以て、
 汝の全身の血を以て……
 切りはなれた一筋から汝の手と足が自由を得るだらう、
 そして手は武器をとるだらう、
 口は叫ぶだらう、
 足は汝を運ぶだらう。

人間よ、すべてのものは汝を怖れてゐるのだ、
 汝に勝るものはこの世界に何も無い、
 ——神もまた汝の力と意志を借りるのだ、
 汝が自由になつた時、
 汝を縛つた怪物共から汝の自由を回復した時、
 同時に汝は一切の汝等の所有を失ふだらう、
 過去を失ふだらう、
 一切の既成の文明を失ふだらう、
 ——おゝそれは汝にとつて最初の勝利だ、
 天と地との間に汝はたゞ一人だ、
 うづまく大氣と暗黒とひらめく雷電と何者とも知れぬ流動の世界に赤裸の汝がたゞ
 一人だ、
 そしてたゞひとり汝の力と意志のみが新しい世界をつくるのだ、
 その中に汝の道をつくるのだ、汝の光をつくるのだ、

76 汝の生命が汝に還り、汝の正しい生長が汝を導くのだ。

何者とも知れぬ巖角に十重二十重に縛り上げられた人間よ、
先づその一筋を切り放て。

體全と人一

いまは分娩の苦しみに悩む時だ

體全と人一

いまは分娩の苦しみに悩む時だ、

暗黒のうちに反轉する時だ、

光はいま失はれてゐる、

あらゆる醜惡と自苦のうちにのたうち、

あらゆる災虐と反抗に全勇氣をふるふ時だ、

彼女の顔の色は蒼ざめ、

不斷に戰慄し、

77

四肢の平衡は失はれ、

毒に充ちた悪血が全身に渦まいてゐる、
苦惱……そして既に死にさへも面接する……。

されど見よ嬰兒は既に動いてゐる、
彼はまだ暗黒のうちにその膝を抱いてゐるが、
未知の運命の前にまだ眠りを續けてゐるが、
彼の生命は曙に近づいてゐる、
彼の静止と計り知れざる呼吸の奥に新しき躍動の精神がめざめかけてゐる、
一切の混亂と無秩序の前に一つの道が開かれやうとしてゐる、
一切の暗黒と摸索の前に新しき太陽の光が輝き出でやうとしてゐる。

おゝ一切の苦痛は、うめきは、狂ひは、あわぎは、争鬭は、そして一切の耐忍と勇
氣は生れくる者のためである、
いまは世界の最も下層のうちにあつて醜くき反轉を繰返すも、

いまは哀れむべき中ぶらりんの状態のうちにさ迷ひ廻るも、
やがて産み出す新しき世界、
やがて示現すべき眞實の人類、
一切の誤れる文明の方向、
自束と虚飾の一切の宗教、
誤れる信仰への一切の洪水の上に、
地上の太陽は最初の光明を送り出すであらう、
一切の人類を正しき姿に引戻し、
一切の文明をまことの神の意志のもとに導くだらう。

おゝいまは生死の境に一切のものゝうへに呪咀を吐き出す一個の女性、
その時世界は汝の下に祈禱の聲を擧げる、
汝は回復される、

汝の靈魂はかの天空に羽ばたき、汝の肉體は永久の自然のうちにどゞまる、

榮光は汝を掩ひ、
 神は汝と共にあるだらう、
 いま彼女の眼はある見ねざるものゝ影を追つてゐる、
 この見ねざる影こそは一切の苦痛から彼女を引上る人間以上の力だ、
 おゝ導かれゆく彼女の魂、
 そこに自分を見る——最後の勝利。

高天をめがけて

宏大なる宇宙——そこには一切の星座が動くことなしに居る、
 太陽は煌めいて高天にすべてのものを領有する、
 おゝそのなかにたゞ一つ、

廻轉し、狂ひおめき、燃わさかる火の車のごとく、また自らの痛みに堪わぬる魚
 のごとく、進み兼ね、たじろぎ、しかも尙一刻も停止することなく何處にか到着
 し何處にか己が國を見出でんとし、あらゆる他の星體の靜止と光輝の間を狂者の
 ごとく飛躍し、彷徨ひ、のぼりゆく一個の星、
 おゝその内部は炎然と立つ修羅場、
 叫び、呪ひ、わめき、
 紛亂、争鬭、混雜、殺戮、
 富める者、飢餓に泣く者、苦しむ者、虐げられる者、
 権力を持つ者、力を失へる者、
 あゝ一切の苦悶、うめき、死、
 それらすべてのものを内にして宇宙をさまよふ一個の星、
 おゝ永久に星座を持たぬ一つの星、
 一切の懷疑、一切の自苦、一切の生長の意志のもとに寸時もとゞまり難き力、
 かの高天をめがけてのぼりゆくもの。

バベルの塔

吾々はバベルの塔をつくるのだ、
 何年かゝつても、何百年かゝつても、何千年、何万年かゝつても、
 吾々はいつまでいもこの塔がきつき上げられるまでは、
 それがかの天をつき、神の御座を貫くまでは、
 吾々は吾々の手を休めない、
 吾々の力を失はない、
 吾々の生命は盡きない、
 吾々の足は倒れない、

吾々は時間と云ふものを知らない、倦怠と云ふものを知らない、忘却と云ふものを
 知らない、
 吾々はたゞ我々として土を運び、
 煉瓦を荷ひ、
 鍬をふるび、
 汗みごろになり、
 一日も、一分も、一秒も、一瞬間も休むことなしにゆく。
 吾々の祖先がそれを遣つた、
 吾々の祖父母が、
 吾々の父母が、
 吾々の兄弟が、
 吾々の友人が、
 そして吾々の息子と娘と、それから吾々の未来を継承する数知れない子孫が、

おそらく若しそれがなほ竣功しないならば、吾々の最後の一人の者までが…
 その工事は幾千萬年の間續いてきた、
 吾々人間のうちの一人もがそれを遺つて來なかつた者は無い、
 生涯に僅か一枚の煉瓦切り運ばなかつたものはあるかも知れない、
 一掬ひの土ならでは荷はなかつたものがあつたかも知れない、
 しかし全然それにあづからずに死んで行つたものは一人も無い、
 それは幾度か壊された、
 幾度か倒された、
 幾度か轉へされた、
 暴風雨がそれを倒した、
 地震がそれを打壞した、
 洪水がそれを押流した、
 神さへもが時にそれを防害した、
 しかしそれはまた始められる、

また最初の一個の石が運ばれる、
 一握りの砂が持つて來られる、
 始めは一人が、
 それから五人が、
 それから十人が、
 それから百人が、
 それから一萬人が、十萬人が…
 今度はより丈夫な、より強い、より鞏固な、基礎がつくられる、
 いくらかの時代が過ぎ、
 何百年何千年かの時が過ぎる、
 それは何度か繰返され、繰返された、
 しかし今も尙それはつゞく、
 尙新しい力を以て、
 尙深い信念を以て、

尙固い意志を以て、
尙強い覺悟を以て。

一切の國民、一切の種族がそれに従ふ、
一切の國境を外にして、
一切の侵略と防禦を外にして、
一切の争闘と勝敗を外にして、
彼等のうちものが惨忍な戦争をつゞける時も、
激しい憎惡に燃わ合ふ時も、
彼等が此世界に生れ出でた瞬間から彼等はこの永遠の工事に參與する、
彼等の一人一人のながい生涯、異つた生活、
彼等の一人が他の一人を殺すときも、
あゝその瞬間にも尙それは止められることを知らない、
眠れる時も、彼等愛のうちに夢みる時も、

その手は休められない、
皆が全身を汗にひたし、
皆がながい道を歩み、
皆が互ひにたすけ合ひ、
力づけ合ひ、
抱き合つて働く、
彼等は彼等の塔をつくる、
バベルの塔を、
天にとゞかせる人間の塔を。

吾等が力を合せて、つくるこの塔には、
吾々の血と肉とが塗込められてゐる、
吾々の涙と汗とがそれを固める、
吾等の一人が現れてきた時以來、

無数の吾々の歡喜、叫び、戦ひ、呪咀、悲嘆、劫與、滅亡の歴史がそのなかに認められてゐる、

無数の吾々の苦難、働き、耐忍、生と死がそのなかに封じられてゐる、
いつかはこの塔が完成せられるだらう、

無数の犠牲とはかり知られぬ時間のなかゝら吾々の塔が天空高く聳へるだらう、
いつかな暴風雨にも怖れず、

洪水にも流されず、

地震にもくづされず、

よし神の疾妬の殺虐がいかに鋭き刃を持つて來やうとも、

吾々の塔がそれら一切に及向ひ、

それら一切に反抗し、

それらの前に高く聳へ、

一切の天空と地上の上に永遠の旗を翻へすまでは、

おゝその時を見るまでは、

眞暗のなかでの吾々の作業、

吾々の小さい炬火を失ふな、

それを消すな、

それを振りかざせ、

皆で運べ、皆で築け、

一枚の煉瓦、一握りの土、

シャベルの一すくひ、

老人も、女も、小供も、病める者も、痴愚も、

地上一切の高峰、一切の壓制、一切の不正、一切の紛糾を貫いて、

なほ高く、なほ高く……。

一個の方舟

各々一對の生物をでなく——今日あらゆる無数の獸類、鳥類、蟲類を入れ、ある選ばれたる種族のうちの幾人をでなく——一切の人間、盜賊をも、殺人者をも内にしたノアの方舟、
宇宙をたゞよふ一個の方舟。

吾々の神

一切の地上の既成の神々がその光を失ふ日に吾々の爲めに現れる神、その神は一切の過去を通じて吾々の衷に在つた、
今も在り、
未來は彼のものである。

この神こそは吾々の良心そのものである、
人類の良心そのものである、
吾々無数の民衆のうちにその姿を隠す神、

萬の國民をその最後の實現に導く爲めの晝夜の神、
 彼はおそらく姿を現さぬであらう、
 しかも吾々の爲めの一切の裁斷、一切の進行、一切の力、一切の勇氣は彼のうちに
 ある、

吾々は彼の前にまでゆく、

一切の地上の法則も、制裁も、形罰も、吾々を改め得ない、

吾々は彼にまでゆく、

自分自身の良心にまでゆく、

人類の良心にまでゆく。

自分自身のうちに於ての神の「レアリザツシオン實現」、

一切の個人の到達すべきはこゝだ、

一切の國民の到達すべきはこゝだ、

吾々は吾々のうちの不幸や惨忍や醜惡に對しても忍ぶだらう——一つのこと起つ

て來る時に吾々はそれを沮止することは出來ない、

吾々は殺人、戦争、其他のあらゆる不正に對しても吾々を押へるだらう——それは不

正である、然し見よ夫等ものは吾々のうちに盡きない。

一切のものを肯定する吾々の神、

然し見よ其處に生れて來る人類の眞實、

「レアリザツシオン實現」の爲めの階程、

吾々の胸は苦しみのうめきを發すれども、

吾々は受ける、吾々は抱く、

おゝ之れこそは吾々人間、

吾々の神はそれに堪ね得るだらう、吾々の神は吾のうちに不朽の基礎をつくること
 を止めぬだらう、

おゝそして、吾々は生きる。

大正五年八月廿五日印刷
大正五年九月一日發行

兵庫縣川邊郡小瀨村字川面山の上八七

著作兼印刷發行人 百田 宗治

兵庫縣寶塚 表現發行所發行 價五拾錢

東京麻布區材木町四九 霞亭會販賣局發賣
大阪東區內久寶寺町二

同人著 詩集 最初の一人

千九百拾五年六月發行・四六判・價四拾錢送料四錢

262
179

終

